

アンジェラ

2006(平成18)年5月14日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督・脚本=リュック・ベッソン/出演=ジャメル・ドゥブーズ/リー・ラスムッセン/ジルベール・メルキ/セルジュ・リアブキネ/アキム・シール/ロイック・ボラ/ジェローム・ゲスドン (アスミック・エース配給/2005年フランス映画/90分)

……リュック・ベッソン監督の記念すべき監督第10作目は、スーパーモデルをヒロインに起用した、いかにも現実離れした物語……。借金まみれで生きる希望を失い、自殺を決意した中年男と、彼に対して「あなたと同じことをする」と告げてセーヌ河に飛び降りた金髪の大オンナとの不思議な物語の展開は……。 「アンジェラ、君は一体何者なんだ？」とあなたも考えながら、自分の人生をあらためて考えてみよう。監督自身が、「決してエンディングの秘密を明かさなさいください」とアピールしているが、アッと驚くその結末とは……？

リュック・ベッソン監督の「お願い」とは……？

「映画の結末は絶対にしゃべらないで下さい」という「お願い」は、スリラー映画によくあることで、特にM・ナイト・シャマラン監督の『シックス・センス』(99年)以降その傾向が強まった。そして、『ヴィレッジ』(04年)では、「ストーリーの全貌については明らかにしません」という誓約書へのサインが必要という異例のスタイルまで……(『シネマルーム6』310頁参照)。

まさか天下のリュック・ベッソン監督がこんな最近の「流行」を真似たわけではないだろうが、この映画のパンフレットには、「映画をご覧になった日本の皆様へ」として「決して『エンディングの秘密』を明かさなさいください」「それが明かされてしまったら、まだ観ぬお客様の楽しみが半減してしまうのではないかと、とても心配です」と書いてある。また、この映画の製作については徹底し

た秘密主義がとられていたため、マスコミ関係者が大変だったことは『キネマ旬報』5月下旬号の「作品特集」で紹介されている。

あまりこういうスタイルを強調すると、「いかにも……」という感じがして、私はあまり好きではないが、たしかに結末にはかなり驚かされることに……。もっとも、そんなに腰を抜かすほどの「ビックリ」ではなく、ある意味で想定範囲内……？

モノクロ撮影の是非は……？

この映画の売りの1つは、アンジェラ（リー・ラスムッセン）とアンドレ（ジャメル・ドゥブーズ）に続く「3番目の主役」とリュック・ベッソン監督が語るパリのまち。アンドレとアンジェラが自殺しようとするアレクサンドル3世橋やエッフェル塔など、たしかにパリの名所がたくさん登場するが、日本人の多くはそのうちのごく一部を知っているだけ。『ローマの休日』（53年）で、オードリー・ヘップバーンがジョー・ブラドリー記者とともに1日遊んだだけで世界的に有名になったトレビの泉やスペイン広場にある「スペイン階段」そして「ウツつきがこの口の中に手を入れると嘔む」という言い伝えがある「真実の口」ほど、この映画での「パリの風景」が有名になるとは考えられないが……。

また、リュック・ベッソン監督や撮影監督のティエリー・アルボガストは、第3の主役であるパリのまちの映像をシンプルにし、すばらしい詩情を与えるためにあえてカラーとせず、モノクロで撮影したとのことだ。しかし、今やカラー映画に馴れてしまった私の目には、あえて白黒にしたことによる良さを特に感じることはできず、かえって違和感が……？ これってひょっとして、俺の映像センスの欠如……？

ストーリーはいたって単純……？

「この映画の登場人物は2人だけ」と言ってもいいほど、99%、アンドレとアンジェラが出ずっぱり。物語もいたってシンプルで、中年男のアンドレは借金まみれとなって、生きる希望を失い、ついにアレクサンドル3世橋から飛び降り自殺をしようと決心した。ところが、ふと隣りを見ると、先客(?)のアンジェラ

が同じスタイルで飛び降り自殺をしようとしていたうえ、「あなたと同じことをする」と告げて、本当にセーヌ河へ飛び降りてしまった。そこで、アンドレはとっさに「彼女を助けなければ……」と考えて、アンジェラの後を追って河の中へ飛び降り、アンジェラを救い出したところから始まる不思議な物語がこの映画……？ ちなみに、ここでの「オチ」は、実はアンドレは泳げないのに、あまりに突然のことだったため、それを忘れてしまい、アンジェラを救うために自分もセーヌ河に飛び降りたとのこと……。

アンジェラ、君は一体、何者……？

リュック・ベッソン監督による、『ジャンヌ・ダルク』(99年)以来6年ぶりの監督作品がこの『アンジェラ』だから、私も注目していたもの。事前勉強の限りでは、徹底した秘密主義で撮影されたこの映画は、かなり現実離れした映画だろうと予想していたが、まさにそのとおり……。セーヌ河から救出されたアンジェラが、アンドレに対して言うのは、「私はあなたの言うとおりに従う」という何とも意外なもの。こんなモデルみたいな美女(ちなみに、アンジェラを演ずるリー・ラスムッセンはホンモノのスーパーモデル……)から、いきなりそんなことを言われても、貧乏たらしい中年オヤジが「ああ、そうか」と信用できるはずがない。ためしに「それなら俺にキスをしろ」と言っすんなりキスされても、まだ信じられないのが当たり前……。

ところが、その後のアンジェラの行動を見ていると、まさに何でもオーケー。そして、「私に不可能なことは何もない」というパーフェクトレディ……。アンドレの借金返済のための資金をたちまちつくってきたばかりか、有頂天になって競馬でスッてしまったアンドレのために、一晩に何十人もの男に身体を売って(?)、再度きっちり資金稼ぎまで……。一体彼女は何者……？ これも、ここでは言わない方がいいだろう……。

それにしてもよくしゃべる……

中年男のアンドレを演ずるジャメル・ドゥブーズは、右手をいつもポケットに突っ込んでいてこれを外に出すことがないのがトレードマーク(?)になってい

る。これは現実に彼が8歳の時、鉄道事故で右手を失ったのが原因らしいが、その真相は、さて……？

ここで私は「中年男」と書いたが、それは映画の中でのアンドレのいかにもむさ苦しいイメージを前提としたもの。ところが、あらためてパンフレットで確認すると、ジャメル・ドゥブーズは1975年生まれだから、まだ31歳で中年男などではない。フランスを代表する若手コメディアンとして活躍中とあるからビックリ……。

そんなジャメル・ドゥブーズ演ずるアンドレの特徴は、よくしゃべること。映画のストーリーでは、アンドレはアメリカの市民権を持っているらしい。そこで、映画の冒頭、借金取りたちはアンドレに対して「アメリカ人はしゃべりすぎ……」と非難。私がスクリーン上で見ている、借金の返済を迫られる中でアンドレがしゃべる言葉は、半分口からでまかせで信用できないと思うものばかり。したがって、こんな弁解を聞けば聞くほど腹が立ってくることになり、「もうしゃべるな！」と怒鳴りたくなる借金取りの気持もよくわかる……？ これと対比すれば、日本におけるサラ金の「多重債務者たち」は、このアンドレのような口八丁の弁解などとてもできず、ただ落ち込むのみ……。

こんな「大オンナ」はどうも……？

聞くところによれば、日本男児は外国人女コンプレックスが強いらしい……？ したがって、日本が軍事的・政治的・経済的に強い時は、外国人女に対して強く出ることができたいが、立場が逆になると、たちまちシュンとなってしまいうらしい……？ 1945年8月15日の日本敗戦後、日本男児たちは、アメリカ人男性に対してはもとよりアメリカ人女性に対してはからっきしダメだったようだ……？

そんな外国人女コンプレックスが、戦後60年の日本でもまだ続いているのかもしれないが、今でも多くの日本人男性はデッカイ女が嫌い……。とりわけ、金髪で長身で豊満な外国人女性には逃げ腰になることが多いのでは……？ もっとも、最近では日本でも叶姉妹のような超豊満な女性が人気を集めているから、多少はその傾向も変わっているのかも……？ しかしそれでも、基本的に大オンナは苦手なはず……。したがって、この映画のヒロイン、アンジェラを演ずるリー・ラスムッセンを、私を含めた多くの日本人男性はあまりお好みではない……？

観客席はガラガラ……

昨日5月13日（土）に観た『ナイロビの蜂』（05年）は、年配者を中心としてほぼ90%の入りが多かったが、14日日曜日の夕方に観た『アンジェラ』の観客席はガラガラ。多分日本での上映期間中ずっと似たようなものだろう。

パンフレットの中で、リュック・ベッソン監督自身が「おそらく『TAXi』（98）や『グラン・ブルー』ほどはヒットしないだろうが」と述べているとおりの結果になりそう。もっとも、リュック・ベッソン監督は続けて「それは重要なことじゃない。観ていて幸せを感じる映画、それを撮りたかったんだ」と述べているが、さてそれは本心、それとも負け惜しみ……？

たしかに、心は美しいけれども外見は見すばらしい中年男、そして借金まみれでウソばかりついて、生きていく希望を失い、遂に自殺まで決意していたアンドレが、アンジェラのおかげで自信を取り戻し、逆にアンジェラに対してある「働きかけ」を行っていくラストシーンの盛り上がりは、ある意味、感動的。しかし、その程度の感動作は、今ドキたくさんあるのでは……？

リュック・ベッソン監督 VS キム・ギドク監督

この『アンジェラ』がリュック・ベッソン監督の記念すべき監督10作目なら、韓国が誇る世界的才能のキム・ギドク監督の第10作目が『サマリア』（04年）で、これはすばらしい映画だった（『シネマルーム7』396頁参照）。両監督の作品をすべて観たわけではないが、私が観た映画の範囲で両監督を比べると、この10作目の『アンジェラ』VS『サマリア』を比較しても断然『サマリア』の方が上。さらに、キム・ギドク監督の第11作目の『うつせみ（空き家／Bin-Jip）』（04年）はすごい映画だったから、リュック・ベッソン監督も、90年代にした「10本撮ったら監督を引退する」との宣言を取り消して、是非それに対抗できる第11作目の傑作づくりにチャレンジしてほしいものだが……。

2006(平成18)年5月15日記